

大阪的 コミュニティの ニュースレター



Vol.3

発行日：2026年10月25日
(一財)大阪コミュニティ協会



長屋カフェやったらええやんと人



あつこの人そうかそうやね今風ね



水遊び堂島川の未来的

▲川柳にしたい大阪のいまどき：左から、東成区のとある風景 / Osaka Metro の社会実験「ロボットが案内人」 / 堂島川とカヌー

川柳〔せんりゅう〕と大阪の川柳的気質

短詩文芸。では、俳句や短歌は詩的であり叙情的。川柳は「庶民の味方で社会派」と解説されています。

一方、田辺聖子が著した「道頓堀の雨に別れて以来なり」は、川柳を文芸の境地へと高めた功労者の一人、岸本水府（1892～1965年）の句をそのまま著書名に用い、たくさんの川柳作者が（主に）大正から昭和・高度成長期を駆け抜けた「川柳による大河ドラマ」の名作です。

この本を読むと、岸本水府は川柳の創作・普及に邁進するばかりではなく（当時もうすでに）名コピーライターとして大活躍し、短詩文芸の世界観から「たおやかな大阪的コミュニティ」へと誘われていたことがわかります。

川柳界を発展させたのは全国をネットワークする創作に打ち込む「番傘」の同人らの活躍でした。その活動拠点「番傘川柳本社」が大阪市北区にあります。その月刊誌「番傘」は大正2（1913）年の創刊で特に戦後、岸本水府らの活躍で隆盛を極めたそうです。

番傘川柳本社は非営利・NPO型で活動されている川柳創作活動の中心で、事務局長・穂山さん（右下写真：「オシャレなロゴ」旗と）、編集ご担当の八木さんから「句碑になった」名句を教えてくださいました。その一部をご紹介します。

戎橋欄干にある記念レリーフ：《戎橋白粉紙を散らす恋（岸本水府）》小出楢重のイラストとともに。同・《友達はいいもの」と知る戎橋（岸本水府）》《大阪はよいところなり橋の雨（岸本水府）》《宝恵籠に雪がちらつく戎橋（麻生よしの）》・・・まだまだあります。

初代中村鴈治郎を詠み除幕式には中村珠緒も出席した道頓堀今井の岸本水府の句碑：《類かむりの中に日本一の顔》。

さらに、「番傘」創刊号を飾った《上爛やへいへいへいと逆らわず》この西田當百の碑は法善寺横丁 正弁丹吾亭前。《上爛や、とは大阪から全国に広がった上質な居酒屋さんの営業スタイルでTVドラマなどにも頻繁に登場します。上機嫌になったお客さんに符丁を併せる料理人の「へいへいへい」が意味深で滋味豊か、可笑しみの情景が広がる名句です。

野崎観音の境内と山上にはこんな句碑もあるそうです。《合掌の指にあかりがしかとある（田中桂太楼）》《凡人の幸せ明日を疑わず（木幡村雲）》・・・今この時代に沁みる川柳です。

五七五の世界に人の機微、今ある世界の情景が描かれる。川柳って「すごいなあ～！」SNSで「短文に馴染む」若者にも「アクセスしやすい仕掛け」があれば・・・川柳の「現代アート性」を強く感じました。

ちなみに、冒頭写真に添えられている五七五は、編集室からの詠み人知らず、でした。



【月刊川柳誌「番傘」バックナンバーの購入などのお問合せ】
番傘・事務局 ☎06-6361-2455/10時～17時 / 土日祝休み。



アート & コミュニティへの試み

一般財団法人 大阪市コミュニティ協会は、今年3月のお彼岸、1週間にもわたり、北御堂を会場にお借りして「北御堂芸術祭—あそべばアート—」というイベントを開催しました。この試みは、昭和の時代の高度成長期「都心部は働く所、住まいは郊外に」の定番化したライフスタイルが行き渡り、都心で暮らす人の姿が極端に減り、そこから一転、2000年代に入り今度は都心部でのマンション居住が進み、今では、都心エリアの「暮らし」が、逆に増加に転じたことで「暮らし・働く / 学ぶ・楽しむ」など生活全般のニーズが深化し始め、文化やアートに対する新志向も高まりを見せ始めたことに起因しています。

大阪では、大学を工場と同列に扱う工場等制限法（略称・2002年7月廃止）の規制・誘導から大学の郊外化が大きく作用し、特に「学ぶ / 楽しむ」のリセットが顕著でした。

そんな中、弊協会はこの7月、大阪大学中之島芸術センターと包括連携協定を締結しました。この目的は、中之島に位置する「中之島芸術センター」が、より深く大阪的なコミュニティと結ばれ、広く芸術の種が涵養されることをイメージし、「そこ・ここ」へのアートな活動や行動を具現化するための連携です。

「あそべばアート」は小さな成功でしたが、それでも新志向に至ると思われる「生活スタイルの新種」を発見することができました。その内のひとつが、「コミュニティの中でアートを学ぶ」でした。

右記の動画をご覧くださいと、今春開催した「あそべばアート」の試みをご覧ください。来夏には、これら先達とのネットワークに共感し、コミュニティ協会と大阪大学中之島芸術センターが「大阪大学中之島芸術センター」を会場に、さらに進化した「あそべばアート」で「アートを楽しみながら学ぶ、新しいコミュニティの試みを披露する計画です。ご期待ください。



▲包括連携協定締結式

写真左：大阪大学中之島芸術センター 河原センター長
右：（一財）大阪市コミュニティ協会 大垣理事長

「北御堂芸術祭—あそべばアート—」 ダイジェスト動画

動画提供：

大阪大学中之島芸術センター

藺田 郁 先生



鍋のうんちく



旨いものを食べるとき、その「うまさ」を語り合えば旨味が倍増します。ところが、カニ鍋でうんちくを語ろうとすれば、カニが無くなってしまいかねないので皆黙々と食べます。しゃぶしゃぶの「ええとこの肉」も然り、無くなってしまう恐れから戦々恐々黙して食べます。

その点、水炊きはいいいのです。諸説あるそうですが、大阪の高度成長期、手仕事や下請け工場の食卓を助けたのは水炊き。さらにそれを支えたのは、ぼん酢（ぼん酢醤油）。これを共にすれば日々毎日の夕飯が大いに助かるし、食卓が弾み、団らんの会話が弾みます。

それは今日的ニーズでもあります。食材の選び方次第でお財布にもやさしく、手軽で、とにかく旨い。一人で味わうもよし、皆で囲めば、自然と笑顔がこぼれます。

そんな愛くるしい水炊きのセミナーがあるらしい。「どんなかなあ〜？」

「水炊き郷土料理化宣言セミナー」を3会場で開催

「水炊き郷土料理化セミナー 〜知って、味わって、もっと好きになる 関西の水炊き〜」を開催します。本セミナーでは、水炊きの歴史やぼん酢との関わりを学び、有馬温泉に残る江戸時代の献立をもとにした「宝暦5年の有馬の水炊き（鴨の水炊き）」をご試食いただきます。歴史を知り、実際に味わいながら、関西の水炊きの魅力とこれからを皆さんと一緒に考えます。

関西の水炊きを地域の食文化としてもっと広め、家庭の定番料理として次の世代へつないでいきたい——そんな思いを、この「水炊き郷土料理化宣言」に込めています。

ご家庭でも水炊きを楽しんでいただけるよう、ミツカン商品のおみやげもご用意しています！

主催：一般財団法人 大阪市コミュニティ協会 共催：株式会社 Mizkan 大阪支店
【本件に関するお問合せ】一般財団法人 大阪市コミュニティ協会（TEL：06-6125-3311）

「水炊き郷土料理化宣言セミナー」 開催情報

旭区民センター会場



日時：2026年11月16日（月）
18:30 開始《18:00 開場》／20:00 終了予定
会場：日タク旭区民センター 3階集会室1
（旭区中宮1-11-14）

東成区民センター会場



日時：2026年11月26日（木）
18:30 開始《18:00 開場》／20:00 終了予定
会場：東成区民センター 6階集会室 601・602
（東成区大今里西3-2-17）

天王寺区民センター会場



日時：2026年12月1日（火）
18:30 開始《18:00 開場》／20:00 終了予定
会場：天王寺区民センター 2階第2・3会議室
（天王寺区生玉寺町7-57）

※いずれも参加費1,000円、定員30名
※事前申込制。お申込みは各二次元コードから

10月14日は『鉄道の日』

大阪の鉄道のはじまり

鉄道は、商いを運び、大阪のまちの品格をつくった



『浪花名所』 大阪府鉄道寮（小信画）| 明治時代の大阪駅を描いた錦絵
※大阪府立中之島図書館蔵

1874 | 大阪に汽車が来た日

日本初の鉄道が新橋―横浜間に開通したのは、明治5（1872）年10月14日。その2年後、神戸―大阪間にも汽車が走り始めました。初代大阪駅の周囲は、水田と墓地が広がる湿地帯。人や物を運ぶ主役は、まだ水運でした。

貨物が支えた、大阪の商い

日清・日露戦争を経て、旅客も貨物も急増。明治末期には大阪駅から貨物の機能が切り離され、貨物専門の「大阪荷扱所」が設けられます。鉄道は、人の移動だけでなく、大阪の商いを支える大動脈へと育っていきました。



明治期の貨物輸送のイメージ

豆で数えた「鉄道は商売になるか」

大阪と堺の商人たちは、両都市を結ぶ鉄道が私企業として成り立つかを見極めるため、毎日、大和川を越える人の数を袋に豆を入れて数え、採算を試算したと伝えられます。明治18（1885）年、まず難波―大和川北岸が開通。架橋を終えた明治21（1888）年には堺まで延び、事業は高配当を生むほどの成功を収めました。

移動の器にとどまらない「駅」

この成功は、のちの南海、近鉄、阪急、阪神、京阪へと続く「関西の私鉄王国」発展の幕開けとなります。当時、関東でみられたような国鉄駅への間借りではない、独立したターミナル駅を各社が築きました。梅田駅、難波駅、大阪上本町駅には、高い天井、華やかな装飾、豪華なシャンデリアを備えた駅がありました。

一流の設計者が手がけた駅舎建築は、移動の器にとどまらず、私鉄王国・大阪の都市の品格をつくってきた文化遺産でもありました。

路面電車がつなぐ、明治と今

大阪市電が走り始めたのは明治36（1903）年。その歩みは、現在の大阪市高速電気軌道（Osaka Metro）へと受け継がれています。

一方、今も大阪府内で唯一、路面電車としてまちを走る阪堺電気軌道。明治から現代へ、姿や役割を変えながら、路面電車是大阪の暮らしと風景を結び続けています。



阪堺電車 昔の面影と、今を走る堺トラム



大阪市電



阪神電車



南海電車



京阪電車



近鉄電車

明治期から走り始めた鉄道・市電の姿

この冬、7社が語る物語を7コマの生涯学習講座へ

2027年1月より、大阪市高速電気軌道株式会社（Osaka Metro）、近畿日本鉄道株式会社、京阪電気鉄道株式会社、南海電気鉄道株式会社、日本貨物鉄道株式会社（JR 貨物）、阪堺電気軌道株式会社、阪神電気鉄道株式会社の7社による全7コマの鉄道講座を開講します。旅客、貨物、地下鉄、路面電車——それぞれの現場だからこそ語れる、大阪の鉄道の魅力をご紹介します。

詳細・受講生募集方法は11月初旬、（一財）大阪市コミュニティ協会のホームページでご案内します。

（お申込みは2026年12月からの予定）

画像提供：

大阪市高速電気軌道株式会社（Osaka Metro）、近鉄グループホールディングス株式会社、京阪ホールディングス株式会社、南海電気鉄道株式会社、阪堺電気軌道株式会社、阪神電気鉄道株式会社

羽雀塗荘コレクション 大丸モダン だいまるの巻②

橋爪節也

大阪大学名誉教授。1958年大阪市南区（現・中央区）生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館・館長を歴任。専門は日本美術史。木村蒹葭堂、北野恒富、佐伯祐三など大阪ゆかりの日本を代表する文人、画家の展覧会に多く携わる。著書に「大丸イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像」（創元社）など多数。

はすずめとそう
◎「羽雀塗荘」は、橋爪節也先生の生家が
塗装業（橋爪塗装工業）を営んでいたことにちなんでいます。

心斎橋のまちとともに、人々の暮らしを彩ってきた大丸百貨店。大正・昭和期に発行していた月刊カタログ「だいまる」には、当時の大阪の文化や暮らしを映すように、さまざまな魅力が詰まっています。

まず目を惹くのは、大丸の图案家・森脇高行らによる、モダンガールが登場するおしゃれな装画や挿絵の数々です。中面にも色が施され、商品を紹介する小さなカットから季節を感じさせる图案まで、軽やかな線と粋なデザインが誌面を彩ります。レイアウトや、文字と图案の組み合わせも実にモダン。現代に通じる魅力にあふれています。右に掲載した号の発行年は1926～1927年、今から約100年も前ですから、驚きです。

「だいまる」の面白さは、デザインだけに留まりません。商品の紹介や販促に加えて、作家や文人、多彩な専門家のエッセイなども掲載され、暮らしや文化の話題まで人びとに幅広く届けていました。百貨店が、買い物を楽しむ場所であると同時に、新しい文化や流行に出会う場所でもあることを象徴しています。

心斎橋という大阪のまちの真ん中で、人々の暮らしに寄り添い、生活の喜びを届けていた「だいまる」のカタログ。ページに散りばめられた粋な图案や言葉からは、当時の大阪の人々が日々を楽しみ、新しいものを取り入れていった、その活気も感じられます。



だいまる 8月号（1926）

真夏の海にセーリングするモダンガール。
表紙と裏表紙が1枚につながるダイナミックな装画がモダンで洗練された印象です。

だいまる 4月号（1927）

白いストライプが斬新なファッションで粋に佇む女性。背後には花びらを思わせるパターンが雲のようにわき起こります。右の裏表紙にもパターンが連続し、売場で取扱っていた品のある茶器が紹介されます。



豊かなカラー刷りの挿絵が用いられ、とても華やか。エッセイなどの読み物も掲載。



大丸心斎橋店にて「300 祭」を開催

大丸心斎橋店は11月1日に開業300周年を迎えます。これを記念して10月31日～11月26日に「300 祭」を開催。同店や心斎橋の歴史を伝える写真、広告、マッチラベルなどの資料をはじめ、店の記憶をたどる品々を館内で紹介します。浮世絵や『火の鳥』の関連資料など、多彩な文化資料と百貨店の歴史を組み合わせた展示もあり、さらに御堂筋側には、同店ゆかりの意匠を取り入れたメリーゴーランドも登場。資料の数々や体験を通して、まちとの関わりに目を向けながら、心斎橋の300年を振り返ってみてはいかがでしょうか。



地下鉄開通を記念して昭和9年に配られた「300 祭」では、約2帖の展示スペース「ひとまず」サイズとなって登場。

■編集後記

喜怒哀楽やユーモアを軽やかに編む五七五▼川柳にはそこに穿ち「うがち」が必要でした▼試しにやってみました、これは奥が深い▼物価高の心境を川柳に託してみました▼デパートのインバウンド見て世界旅。地球儀に世界は広しサーチャージ。いずれも迷句▼社会性+頭の体操＝番傘川柳。皆様もどうですか。

《編集・発行》

一般財団法人 大阪市コミュニティ協会
大阪のコミュニティのニュースレター 編集室 編集担当・李有師【り ゆうじ】

《お問合せ》

〒541-0055 大阪府大阪市中央区船場中央1丁目3番2-302
✉ contact@osakacommunity.jp 代表電話：06-6125-3311



（一財）大阪市コミュニティ協会 マスコットキャラクター
こみぴー